

中国語を第一言語とする日本語学習者の 漢語連語と和語連語の習得

— 中国語と同じ共起語を用いる場合と用いない場合の比較 —

小森和子・三國純子・徐一平・近藤安月子

要 旨

日中同形語は、日本語と中国語の意味的關係に基づき、S 語（同義語）、D 語（異義語）、O 語（類義語）に分類される。S 語は日中両言語で同義とされているが、取りうる共起語は必ずしも一致しない。中国語で可能な共起でも（整理头发）、日本語では漢語とは共起できず（*髪のを整理する）、和語を用いなければならないものもある（髪のを整える）。本研究では、中国語を第一言語とする日本語学習者が、日本語の S 語で中国語と同じ共起語がとれるものととれないものをどの程度正しく弁別できるか、また、共起語によっては、漢語でなく、和語でなければ成立しない連語形式を、どの程度習得できているかを明らかにするために、92 名を対象に調査を行った。その結果、中国語と同じ共起語がとれない語については、日本語能力試験 1 級以上の超級者でも習得が進んでいないことが示された。また、中国語の知識を和語にも転用する傾向があることが明らかとなった。

キーワード：日中同形語 S 語 漢語 和語 共起語

1. はじめに

日本語の語種には、漢語、和語、外来語、混種語があるが、漢語の中には日本語でも中国語でも用いられる同形語がある。文化庁（1978）は、日本語と中国語とで、どの程度意味が一致しているかに基づいて、同形語を S 語、O 語、D 語に分類している。S 語は、「経済」と『经济』のように、日本語と中国語とで意味がほぼ一致する語である（Same 語）（誤解を避けるために、日本語には「」を、中国語には『』を付す）。O 語は、両言語に共通の意味があるが、どちらか一方に独自の意味がある（Overlapping 語）。例えば、日本語の「対象」も中国語の『対象』も、＜目標となるもの＞という意味は共通しているが、中国語の『対象』には、＜恋人、結婚相手＞という独自の意味もある。D 語は、日本語と中国語とで全く意味が異なる（Different 語）。例えば、中国語の『暗算』は＜ひそかに陰謀を企む＞という意味で、日本語の「暗算」とは意味が全く異なる。

これまで、第二言語としての日本語の習得研究では、日本語と中国語で意味の異同が微妙な O 語や D 語が研究の対象となることが多く、S 語に関する習得研究は少ない。しかしながら、文化庁（1978）の定義する、日中間で意味が一致するというのは、日中辞典と中日辞典の両方の辞書で意味記述が一致する、ということであり、意味が異なるというのは、一方の辞書に記されている意味が他方の辞書に記載されていない、ということである。そのため、S 語でも、とれる共起語や選択制限等の用法においては、二言語間で異なる場合もある。例えば、日本語の「整理」と中国語の『整理』は、辞書の意味記述では、＜乱れたものを秩序正しく整える＞という共通の語義を有する。しかし、中国語の『整理』では、『整理头发』と言えるが、日本語の「整理」では「*髪の毛を整理する」とは言えない。日本語では「髪の毛を整える」と、和語を用いるのが適切であろう。このように、共起や用法の点から見ると、S 語も中国語とズレがあることもある。

そこで、本研究では、中国語と同義だとされている日本語の漢語の中で、中国語と同じ連語形式と、中国語と異なる連語形式について、また、漢語でなく和語を用いた方が適切な連語形式について、中国語を第一言語とする日本語学習者（以下、中国人学習者）がどの程度正確に習得しているか、また、中国語の知識が日本語の漢語と和語の習得にどのように影響を及ぼすか、について検討する。

2. 先行研究

同形語に関する研究は、O 語や D 語を対象にしたものが多く（例えば、小森・玉岡, 2010 ; 加藤, 2005 ; 陳, 2003 ; 林, 2002 ; 五十嵐, 1996 ; 黄, 1994 ; 高, 1989 ; 菱沼, 1980 ; 守屋, 1979）、S 語はあまり研究の対象とされてこなかった。そのため、S 語に関する実証的な研究報告は少ない。

その中で、日本語と中国語の品詞の違いが習得に及ぼす影響を考察した研究に、石・王（1983）や侯（1997）がある。石・王（1983）では、日本語学習者を対象に、日本語の同形語の品詞の習得を分析したところ、中国語で用いられる品詞をそのまま日本語に当てはめようとする傾向が認められた。また、侯（1997）は、中国人学習者の品詞に関する誤用を分析し、中国語では動詞だが、日本語では名詞になるもの（「*事業に関心する」、「*利益を損害する」等）や、中国語では形容詞や副詞だが、日本語では動詞になるもの（「*経済はまだ発達ではない」、「*非常に緊張だった」等）に、誤用が多いことを報告している。

また、S 語の意味や共起語に関する研究に、大塚（1990）、柳（1997a, 1997b）がある。大塚（1990）は、『現代汉语八百詞』を基に、文化庁の示した S、O、D の分類を見直した。その結果、S 語の中に O 語とすべきものがあることを指摘し、意味分析の観点から同形語を分類すべきだと主張している。さらに、柳（1997a,

1997b) は、S 語の日中の違いを共起の観点から考察した。例えば、中国語の『保持』は、日本語の「保持」「保つ」に対応しており、『保持传统』は「伝統を保持する」「伝統を保つ」と言えるが、『保持清洁』は「*清潔さを保持する」ではなく、「清潔さを保つ」となる、といったように、共起語によっては、日本語では正用にならない語があるため、どのような語と共起可能かを学習する必要があると述べている。

3. 研究課題

S 語は、意味においては日本語と中国語とではほぼ一致していると考えられ、これまで、あまり習得研究の対象にならなかった。しかし、S 語は、用法においては、必ずしも日本語と中国語とで一致しないため、中国語で成立する共起関係が日本語では成立しない場合もある。共起語によっては、日本語は和語が適切なこともある。そのため、中国語の共起関係をそのまま日本語に転用すると、誤用となる可能性がある。そこで、本研究では次の2点について検討する。

研究課題1. 日本語の漢語(S 語)の中で、中国語と同じ共起語をとる漢語と、中国語と同じ共起語をとらない漢語とで、習得にどのような違いがあるか。

研究課題2. 共起語によっては漢語(S 語)でなく、和語でなければ成立しない場合があるが、和語はどの程度習得できているか。

なお、本研究は、中国語にも存在する日本語のS 語の習得に、中国語の知識がどのように影響するかを検討するため、調査対象者は中国人学習者に限定される。

4. 調査

4.1 調査対象者

調査は2010年9月に中国で実施した。調査対象者は、北京市内の大学で日本語を学んでいる学部2年生から修士2年生までの92名(男性18名、女性74名)である。調査時における日本語学習歴は平均3年6カ月で、最も短い者で1年、最も長い者で9年であった。92名のうち、33名は(旧)日本語能力試験1級(400点満点)の合格者であったが(平均340点、標準偏差24.48)、それ以外の59名は、1級は不合格、あるいは、未受験であった。

4.2 手続き

初めに、和語の知識を測定するために、和語の正誤判断テストを実施した。次に、調査対象者を日本語能力で群分けするために、日本語習熟度テストを行った。その後、漢語の知識を測定するために、漢語の正誤判断テストを実施した。最後に、簡単なアンケートを行った。所用時間は全部で約2時間であった。

4.3 材料

本節では、調査に用いた日本語習熟度テストの作成、対象語である和語と漢語の選定、および和語と漢語の正誤判断テストの作成、について述べる。

4.3.1 日本語習熟度テスト

日本語習熟度テストは、平成 18 年度の（旧）日本語能力試験の 1 級と 2 級の、文字・語彙、文法、読解の 3 類から、識別力と困難度を参考に筆者が編集した。

問題項目数は、1 級と 2 級からそれぞれ 22 問ずつ、合計 44 問である。類別では、文字・語彙 15 問（1 級 7 問、2 級 8 問）、文法 15 問（1 級 8 問、2 級 7 問）、読解 14 問（1 級と 2 級、各 1 種類の文章と設問が 7 問）である。

4.3.2 調査対象語

調査対象語は、S 語の日本語の漢語動詞と、その漢語動詞に意味的に対応する和語動詞である。調査対象語の選定は、以下のような手続きで進めた。

まず、漢語動詞を選定した。漢語動詞の選定基準は、中国語にも存在する S 語であり、かつ、（旧）日本語能力試験の出題基準の 4～2 級の語で、動詞の用法を持つ語とした。なお、S 語の判定は、文化庁（1978）と張（1987）に基づく。

次に、和語動詞を選定した。和語動詞は、上記のようにして選んだ漢語動詞を構成する 2 つの漢字のうち、どちらか一方の漢字による和語動詞が存在し、かつ、当該和語動詞を中国語に置き換えると、中国語では S 語になる語とした。

例えば、中国語の『整理』は、対応する日本語の漢語動詞「整理する」が S 語に分類されており、（旧）日本語能力試験の 2 級の語彙である。また、前項漢字の「整」を用いた「整える」という和語動詞（2 級）も存在する。さらに、この「整える」は、『標準日中辞典』には中国語の対訳として『整理』が記されている。よって、中国語の『整理』に対応する漢語動詞として「整理する」を、さらに和語動詞として「整える」を、調査対象語として選定する、という流れである。

このようにして選定した日本語の漢語動詞は、「建設する、縮小する、出現する、消失する、進歩する、整理する、接近する、設立する、堆積する、停止する、提出する、乾燥する、破壊する、破裂する、発生する、表現する、表示する、分配する、保持する、練習する、」の 20 語である。一方、対応する和語動詞は、「建てる、設ける、縮む、縮める、現れる、消える、進む、整える、近づく、積もる、止める、止まる、止める、止む、出す、乾く、破る、壊す、生じる、表す、示す、分ける、保つ、習う」の 24 語である。なお、和語動詞の方が数が多いのは、漢語と和語の対応関係が、必ずしも 1 対 1 でないことによる。例えば、「縮小する」は自他動詞であるため、対応する和語は、自動詞「縮む」と他動詞「縮める」の

2つを抽出した。また、「破壊する」は、共起語によって、「壊す」と「破る」のいずれに対応するかが異なるため、両方とも取り上げた。

次に、選定されたS語は中国ではどのような語と共起するか、それは日本語の漢語動詞、和語動詞と同じか否かを、コーパスで確認した。中国語は現代中国語コーパスを、日本語は現代日本語書き言葉均衡コーパスを参照した。例えば、中国語の『提出』は、『名単（「名簿」に相当）』『問題』『意見』『要求』等と高頻度で共起していた。漢語の「提出する」は「名簿」「証明書」「法案」などと、高頻度で共起していた。また、対応する和語「出す」は、「意見」「手」「書類」等との共起が上位に挙がっていた。中国語、漢語、和語の間で同じ共起語をとる場合もあれば、中国語と漢語、中国語と和語、の間で同じ共起語をとる場合もあった。

そこで、中国語では成立する（○）共起関係で、日本語の漢語で言えるものと言えないもの（○・×）、和語で言えるものと言えないもの（○・×）、を組み合わせて、4タイプに分類した。なお、これらの4タイプを便宜的にA、B、C、Dと呼び分ける（表1）。

表1 漢語と和語の共起の適否

タイプ	数	漢語	漢語動詞 (適否)	和語動詞 (適否)
A	19	整理头发 (○)	*髪のを整理する (×)	髪のを整える (○)
B	21	建设家庭 (○)	*家庭を建設する (×)	*家庭を建てる (×)
C	23	保持传统 (○)	伝統を保持する (○)	伝統を保つ (○)
D	23	规模缩小 (○)	規模が縮小する (○)	*規模が縮む (×)

注：*は不適切な文であることを示す

Aは日本語の漢語では不適切だが和語では適切（×・○）、Bは日本語の漢語でも和語でも不適切（×・×）、Cは日本語の漢語でも和語でも適切（○・○）、Dは日本語の漢語では適切だが和語では不適切である（○・×）。なお、適切か不適切かは、日本語母語話者5名が判定し、4名以上が適切だとしたものを採用した。このようにして作成、判定した4タイプは、A（×・○）が19、B（×・×）が21、C（○・○）とD（○・×）が23ずつとなった。また、AからDはいずれも中国語のコーパスで抽出された適切な組み合わせであるが、中国語母語話者の筆者により、いずれも適切な共起であることを確認した。

なお、同じ漢語動詞でも、共起語によっては、Aに判定されたり、Cに判定される場合があったため、1つの動詞が複数に分類されたものもある。例えば、「規定」という共起語の場合、漢語「破壊する」を用いた「*会社の規定を破壊した」は不適切であるが、和語「破る」を用いた「会社の規定を破った」は適切である。

そのため、「規定」との共起については、「破壊する」と「破る」の関係はAに分類した。一方、「環境を破壊した」、「環境を壊した」のように、「環境」との共起については、日本語の漢語でも和語でも適切なので、Cに分類した。

4.3.3 正誤判断テスト

上記の4つのタイプの連語に、多少の文脈を加えて、1文が20字程度になるように、漢語と和語のそれぞれについて、正誤判断テストを作成した。但し、同じタイプの漢語と和語は、対象語以外は同じ文にした。なお、4つのタイプの連語は全て中国語では正用となる連語である。よって、日本語に特有の慣用的な連語表現はない。

例えば、前掲の表1の通り、中国語の『整理头发』を「髪の毛を整理する」と直訳し、これに主語や副詞句等の文脈を加え、漢語は「*今朝、私は髪の毛を整理した」とし、和語は「今朝、私は髪の毛を整えた」とした。このようにして作成した正誤判断テストの一例を表2に示す。

表2 正誤判断テストの例

	漢語・正誤判断テストの例	和語・正誤判断テストの例
A	*今朝、私は髪の毛を整理した。 *会社の規定を破壊して、注意された。	今朝、私は髪の毛を整えた。 会社の規定を破って、注意された。
B	*結婚して、明るい家庭を建設したい。 *自分の身に災難が発生した。	*結婚して、明るい家庭を建てたい。 *自分の身に災難が生じた。
C	人々は伝統を保持するために努力した。 日本列島に台風が接近している。	人々は伝統を保つために努力した。 日本列島に台風が近づいている。
D	予算が減って、工事の規模が縮小した。 海岸にゴミが堆積している。	*予算が減って、工事の規模が縮んだ。 *海岸にゴミが積もっている。

注：*は不適切な文であることを示す

5. 分析結果

5.1 日本語習熟度テスト

日本語習熟度テストは1問1点で採点し、92名の得点を求めたところ、平均が31.21点（最低12点、最高44点）、標準偏差（以下、SD）が9.29となった。この結果を基に、人数が概ね均等になるように、調査対象者を3群に分けた。まず、92名全体の平均点の辺りに中位群の平均が来るように、中位群のレベルを設定した。次に、全体の平均点+1SDの近辺に上位群の平均が、また、全体の平均点-1SD付近に下位群の平均が、それぞれくるようにした。このようにして分けられた3群の日本語習熟度テストの得点は、表3の通りである。なお、3群の得点差は統計的に有意だった[$F(2,91)=309.921, p<.001$]。

表3 日本語習熟度別3群の日本語習熟度テストの結果 (44点満点)

	M	SD	最低点	最高点	N
下位群	19.48	3.65	12	25	29
中位群	32.73	4.16	26	38	33
上位群	40.87	1.41	39	44	30

注: Mは平均、SDは標準偏差、Nは人数を示す

5.2 漢語正誤判断テスト

漢語の正誤判断テストは、中国語と同じ共起語をとる漢語 C と D の正誤判断の合計 46 文と、中国語と同じ共起語をとらない漢語 A と B の正誤判断の合計 40 文を、1 問 1 点で採点し、正答数得点を求めた。なお、漢語 C と D の短文は正文文なので、「○」が正解であり、漢語 A と B は非文なので、「×」が正解である。

表4 漢語の正誤判断テストの結果

	下位群 N=29 M (SD)	中位群 N=33 M (SD)	上位群 N=30 M (SD)	合計 N=92 M (SD)
漢語 CD (○) 46 文	38.07 (5.69)	39.24 (4.41)	37.60 (4.50)	38.34 (4.87)
漢語 AB (×) 40 文	11.62 (5.39)	16.42 (5.63)	22.37 (5.29)	16.85 (6.91)

注: Mは平均、SDは標準偏差、Nは人数を示す

採点の結果は、表4の通りである。得点の差が統計的に有意であるか否かを確認するために、共起語可否条件(漢語 CD・漢語 AB)と日本語習熟度条件(下位群・中位群・上位群)の2×3の分散分析を行った。共起語可否条件は被験者内要因、日本語習熟度要因は被験者間要因である。分析の結果、共起語可否条件も $[F(1,89)=514.430, p<.001]$ 、日本語習熟度条件も $[F(2,89)=32.175, p<.001]$ 、主効果が有意であった。さらに、交互作用も有意だった $[F(2,89)=11.802, p<.001]$ 。

交互作用が有意だったので、日本語習熟度条件の各水準(下位群・中位群・上位群)における共起語可否条件の単純主効果の検定を行ったところ、下位群 $[F(1,89)=156.544, p<.001]$ でも、中位群 $[F(1,89)=152.184, p<.001]$ でも、上位群 $[F(1,89)=48.465, p<.001]$ でも、有意であった。すなわち、いずれの群においても、中国語と同じ共起語がとれる漢語 CDの方が、中国語と同じ共起語がとれない漢語 ABより、正誤判断テストの得点が有意に高いということである。

また、共起語可否条件の各水準(漢語 CD、漢語 AB)における日本語習熟度条件の単純主効果の検定を行ったところ、漢語 CDでは日本語習熟度条件が有意でなく $[F(2,89)=0.956, n.s.]$ 、漢語 ABでは有意だった $[F(2,89)=28.881, p<.001]$ 。なお、多重比較の結果、下位群、中位群、上位群のいずれの得点差も1%水準で

有意であった。このことから、中国語と同じ共起語をとる漢語 CD では、下位群から上位群まで得点に差がないが、中国語と同じ共起語がとれない漢語 AB では、下位群、中位群、上位群と、日本語習熟度が上がるにつれて、正しい判断ができるようになる、ということが示された。

5.3 和語正誤判断テスト

和語の正誤判断テストは、中国語と同じ共起語をとる和語 A と C の正誤判断の合計 42 文と、中国語と同じ共起語をとらない和語 B と D の正誤判断の合計 44 文を、1 問 1 点で採点し、正答数得点を求めた。

表 5 和語の正誤判断テストの結果

	下位群 N=29 M (SD)	中位群 N=33 M (SD)	上位群 N=30 M (SD)	合計 N=92 M (SD)
和語 AC (○) 42 文	31.93 (4.28)	31.36 (4.51)	32.10 (4.50)	31.78 (4.40)
和語 BD (×) 44 文	14.21 (4.08)	17.06 (5.74)	20.20 (5.40)	17.18 (5.64)

注：M は平均、SD は標準偏差、N は人数を示す

採点の結果は、表 5 の通りである。漢語テストと同様に、共起語可否条件（和語 AC・和語 BD）と日本語習熟度条件（下位群・中位群・上位群）による 2×3 の分散分析を行ったところ、共起語可否条件も [$F(1,89)=332.301, p<.001$]、日本語習熟度条件も [$F(2,89)=9627.222, p<.001$]、主効果が有意であった。さらに、交互作用も有意だった [$F(2,89)=3.497, p<.05$]。

交互作用が有意だったので、共起語可否条件の単純主効果の検定を行ったところ、下位群 [$F(1,89)=165.878, p<.001$]、中位群 [$F(1,89)=95.803, p<.001$]、上位群 [$F(1,89)=52.366, p<.001$] のいずれも有意であった。すなわち、いずれの群も、中国語と同じ共起語をとる和語 AC の方が、中国語と同じ共起語がとれない和語 BD より、得点が高いということである。

また、日本語習熟度条件の単純主効果の検定を行ったところ、和語 AC では日本語習熟度条件が有意でなく [$F(2,89)=4.727, n.s.$]、和語 BD では有意であった [$F(2,89)=265.211, p<.001$]。和語 BD について多重比較を行ったところ、下位群、中位群、上位群のいずれの間の得点差も 1% 水準で有意であった。すなわち、中国語と同じ共起語をとる和語 AC では、下位群から上位群まで、同程度の得点であるが、中国語と同じ共起語をとれない和語 BD の文正誤判断では、日本語習熟度が上がるにつれて、正しい判断ができるようになるということである。

5.4 漢語と和語の比較

最後に、中国語と同じ共起語をとる場合と、とらない場合の、それぞれにおける漢語と和語の比較を行う（前掲表4と5を参照のこと）。

まず、中国語と同じ共起語をとる漢語（漢語 CD）と和語（和語 AC）を見ると、漢語の方が得点（正答率）は高いものの、下位群、中位群、上位群の間でほとんど差がない。確認のため、語種条件（漢語 CD・和語 AC）と日本語習熟度条件（下位群・中位群・上位群）の分散分析を行ったところ、語種条件では主効果が有意であったが[$F(1,89)=121.209, p<.001.$]、日本語習熟度条件も[$F(2,89)=0.123, n.s.$]、交互作用も[$F(2,89)=1.503, n.s.$]、有意でなかった。すなわち、日本語習熟度に関わらず、漢語 CDの方が和語 ACより得点が高いということである。このことから、同じ共起語をとる場合は、漢語の方が和語より正誤判断が正確だが、漢語も和語も、正誤判断に日本語習熟度が影響を及ぼさないことが分かった。

一方、中国語と同じ共起語がとれない漢語（漢語 AB）と和語（和語 BD）を比較すると、漢語も和語も、日本語習熟度が高くなるにつれて、得点が高くなっていることが分かる。語種条件（漢語 AB・和語 BD）と日本語習熟度条件（下位群・中位群・上位群）について分散分析を行ったところ、語種条件は主効果が有意でなかったが[$F(1,89)=0.320, n.s.$]、日本語習熟度条件も[$F(2,89)=26.942, p<.001.$]、交互作用も[$F(2,89)=4.761, p<.05.$]、有意だった。

交互作用が有意だったので、語種条件の単純主効果の検定を行ったところ、下位群[$F(1,89)=3.97, p<.05.$]と上位群[$F(1,89)=5.47, p<.05.$]で有意であった。しかし、中位群では有意でなかった[$F(1,89)=0.38, n.s.$]。すなわち、下位群では和語 BDの方が漢語 ABより有意に得点が高く、また、上位群では漢語 ABの方が和語 BDより有意に得点が高いということが示された。なお、下位群と上位群とで、異なる傾向が認められたのは興味深い。この点については次節で論じる。次に、語種条件の各水準（漢語 AB・和語 BD）について、日本語習熟度条件の単純主効果の検定を行ったところ、漢語 ABにおいても[$F(2,89)=28.88, p<.001.$]、和語 BDにおいても[$F(2,89)=9.98, p<.001.$]、単純主効果が有意であった。多重比較の結果、漢語 ABも和語 BDも、下位群、中位群、上位群のいずれの間の得点差も、1%水準で有意であった。このことから、日本語習熟度に比例して、漢語 ABと和語 BDの正誤判断が正確になるということが明らかとなった。

6. 考察

研究課題1、中国語と同じ共起語をとる漢語と、中国語と同じ共起語をとらない漢語とで、習得にどのような違いがあるか、については、中国語と同じ共起語をとる漢語の方が、中国語と同じ共起語をとらない漢語よりも、正誤判断が正し

かった。また、中国語と同じ共起語をとる漢語では、下位群、中位群、上位群のいずれも8割以上の高い正答率で、日本語習熟度の影響が認められなかった。一方、中国語と同じ共起語をとらない漢語では、日本語習熟度に比例して正誤判断が正確になるが、上位群でも正答率が低く、習得が困難であることが示された。

以上を総合すると、中国人学習者は、日本語の漢語に中国語の知識を転用することで、日本語習熟度が低い段階から日本語を正しく用いることができる場合がある、また、中国語と異なる用法を持つ漢語は、日本語習熟度に比例して、徐々に正しく習得できるようになる、さらに、中国語の転用が非常に強く、その転用が誤りであることは超級者でも知識が不十分である、ということが分かった。

次に、研究課題2、共起語によっては和語でなければ成立しない連語形式があるが、それはどの程度習得できているか、についても、漢語と同様の傾向が認められた。すなわち、中国語と同じ共起語をとる和語の方が、中国語と同じ共起語をとらない和語よりも得点が高く、3群の得点はほぼ同じであった。このことから、和語に対しても、日本語習熟度の低い段階から、中国語の知識を転用する傾向が強いと考えられる。一方、中国語と同じ共起語をとらない和語の場合は、漢語と同様、日本語習熟度に比例して、得点が高くなるものの、上位群でも正答率は5割以下で、習得が極めて困難であることが示された。

また、中国語と同じ共起語をとれない漢語と和語を比較すると、下位群では和語の方が正答率が高く、反対に、上位群では漢語の方が正答率が高い、という異なる傾向が認められた。この背景の一つに、学習段階によって学ぶ語種が違うことが考えられる。一般に、初級では平易な話し言葉で学習が進められるため、汎用的な和語動詞を使用する機会が多いが、中級以降になると、書き言葉が増え、漢語への接触頻度が高くなり、日本語の漢語と中国語の用法上の異同を意識するようになると考えられる。そのため、上位群になると漢語の方が正答しやすくなるのではないかと考える。但し、和語は多義語が多く、使用頻度が低い語義もあるため、和語の方が習得が困難である場合も少なくない。また、今回は、中国語にも存在する連語形式について調査を行ったため、日本語独特の慣用的な連語形式については、その習得過程は明らかでない。そこで、今後は、中国語にない慣用的な連語形式も含めて、複数の語義について調査を行う必要がある。

以上のように、中国人学習者は日本語習熟度の低い段階から、日本語の同形語に中国語の知識を転用しやすいことが示された。S語の学習においては、意味が似ているように見えても、日本語のS語には中国語と用法が異なるものが多数あることを学習者に認識させ、そうしたS語は日本語ではどのような語と共起し、どのような語と共起しないのか、を明示的に指導、学習する必要があると考える。また、和語にも中国語の知識を転用する傾向が強いことから、漢字1字が共有さ

れていても、和語と漢語は意味用法が異なることを示し、共起語と共に体系的に学習する教材を作成したり、指導法を検討する必要がある。

7. おわりに

中国人学習者は、他の言語を母語とする学習者に比べて、第二言語としての日本語の学習や習得において有利である、と称されることが多い。実際、同形語の3分の2以上がS語であり、意味や概念においては、日本語と中国語とではかなり共通しているため、中国人学習者にとっては、易しい語彙として捉えられがちである。しかしながら、本研究の結果から、S語がどのような語と共起できるのかについては、超級者でも習得が不十分であることが明らかとなった。また、対応する和語についても、明示的な学習の必要性が確認された。

しかしながら、本研究の調査は中国人学習者のみを対象としているため、この結果に基づいて、中国人学習者が日本語のS語や和語に対して、中国語の知識を過剰に転用していると結論付けることはできない。今後は、他の言語を第一言語とする学習者にも同様の調査を行い、本研究の結果と比較する必要がある。また、本研究では、漢語だけでなく、和語においても、中国語の知識の転移の可能性が示されたが、なぜ、和語においても転移が起こるか、明らかにすることができなかった。和語の単漢字を見ると、中国語の語義が自動的に活性化してしまうのだろうか、それとも、そもそも和語と漢語は意味用法が同じだという誤った認識を有しているのだろうか。また、和語と漢語の対応について、中国人学習者はどのように学んでいるのか、教育場面ではどのように扱われているのか等、明らかにしていかなければならない。

今後は、これらの課題について調査を行い、中国人学習者の漢語と和語の習得を困難にしている要因を絞り込み、どのような指導や学習が有効であるかを、検討していきたい。

付記

本論文は第10回日本語教育研究世界大会（2011年8月21日、於：天津外国語大学）にて発表した内容に加筆修正したものである。本研究は、平成20~24年度科学研究費基盤(C)研究（研究代表者：三國純子、課題番号：20520479）による研究成果の一部である。

参考文献

石堅・王建康（1983）「日中同形語における文法的ずれ」『日本語・中国語対応表現用例集』5, 56-82.

- 上野恵司・顧明燿（編）（1996）『標準日中辞典』白帝社。
- 大塚秀明（1990）「日中同形語について」『筑波大学外国語教育論集』12, 327-337.
- 王永全・許昌福・小玉新次郎（2007）『日中同形異義語辞典』東方書店。
- 加藤稔人（2005）「中国語母語話者による日本語の漢語習得—他言語話者との習得過程の違い—」『日本語教育』125, 96-105.
- 関西大学「現代中国語コーパス（現代汉语語料庫）」
<http://we.fl.kansai-u.ac.jp/corpus.html>（2009年9月16日）
- 侯仁鋒（1997）「同形語の品詞の相違についての考察」『日本学研究』6, 78-88.
- 黄正浩（1994）「漢字語彙の日中朝対照研究」『講座日本語教育』29, 334-358.
- 高偉建（1989）「日中同形語の対照研究—日本の漢語の意義特徴を中心に—」『大阪大学日本学報』8, 79-103.
- 国立国語研究所「KOTONOHA 現代日本語書き言葉均衡コーパス検索デモンストラーション版」
<http://www.kotonoha.gr.jp/demo/>（2010年8月5日）
- 小森和子・玉岡賀津雄（2010）「中国語と日本語の二言語併用者による同形類義語の認知処理過程」『レキシコンフォーラム』5, 1-36.
- 張淑榮（編）（1987）『中日漢語対比辞典』ゆまに書房。
- 陳毓敏（2003）「中国語を母語とする日本語学習者の漢語習得について—同義語・類義語・異義語・脱落語の4タイプからの検討—」『日本語教育学会秋季大会予稿集』174-179.
- 菱沼透（1980）「中国語と日本語の言語干渉—中国人学習者の誤用例—」『日本語教育』42, 58-72.
- 文化庁（1978）『中国語と対応する漢語』大蔵省印刷局。
- 北京对外经济贸易大学・北京商务印书馆・小学館（共編）（2002）『日中辞典』小学館。
- 守屋宏則（1979）「資料・日中同形語—その意味用法の差違—」『日本語学校論集』6, 159-168.
- 柳納新（1997a）「關於日汉同形近义词（上）」『日语知识』6, 22-25.
- 柳納新（1997b）「關於日汉同形近义词（下）」『日语知识』7, 23-25.
- 林玉恵（2002）「日華・日漢辞典からみた日中同形語記述の問題点—同形類義語を中心に—」『世界の日本語教育』12, 107-121.
- 吕叔湘（編）（1980）『現代汉语八百词』北京商务印书馆。

（小森：明治大学、三國：文化学園大学、
 徐：北京日本学研究中心、近藤：東京大学）